

## 特集「アジア・太平洋のソフトウェア技術」の編集にあたって

青山 幹雄† 深澤 良彰†† 佐伯 元司††† 磯田 定宏††††

アジア・太平洋地域の経済は、依然、急成長を続けている。2001年には、アジア太平洋地域のGDP（国内総生産）は、全世界の3分の1に近くとの予測もある。

特に、情報処理産業は、戦略的産業として積極的に育成されている。すでに、世界のコンピュータの3分の1以上がアジア太平洋地域で生産されている。また、低賃金を背景にした、先進諸国からのアウトソーシングも活発である。しかし、漢字などの地域言語の問題、開発技術の遅れや技術者の不足、違法コピーの問題、ネットワークなどのインフラストラクチャの整備などアジア固有の問題や高度成長に起因する問題も提起されている。今や、アジア、太平洋地域のソフトウェア技術の現状を正しく理解することが必要な時代である。また、世界、あるいはアジア・太平洋という視点の中から我が国の情報処理産業界と学会が果たすべき役割も考える必要がある。しかし、アジア・太平洋地域の情報処理産業と技術の状況に関するまとまった解説がなかった。本特集は、アジア・太平洋地域のソフトウェア技術の、過去、現在、未来を各国、各地域の人が自ら解説する。

本特集は、Software 2001-A Global Vision というテーマの下、米国 IEEE Computer Society が発行する Software、英国 BCS (British Computer Society)/IEE が発行する Software Engineering Journal (SEJ) との共同特集として企画した。このため、全世界で読んでもらうことを目的に、本特集部分のみからなる別冊号も発行した。このような共同特集は初めての試みである。

さらに、情報処理学会ソフトウェア工学研究会では、1994年12月、第1回アジア・太平洋ソフトウェア工学国際会議 APSEC '94 (Asia-Pacific

Software Engineering Conference '94) を東京で開催した。APSEC は、本特集と軌を一にし、アジア・太平洋地域におけるソフトウェア工学に関する代表的な国際会議とすることを目的としている。本特集の発行は、APSEC の開催と同期している。

本特集は、我が国を含むアジア・太平洋の8つの国、地域の解説を含む9編の解説を掲載する。

「アジアにおけるソフトウェア工学」は、アジア各国へのアンケート調査も踏まえ、我が国を含むアジア・太平洋地域におけるソフトウェア産業と技術を総括する。本解説の英文版は、共同企画した他2誌にも掲載されている。続いて、日本、オーストラリア、中国、インド、韓国、シンガポール、台湾、タイにおけるソフトウェア産業と技術を解説する。これらの解説から、アジア・太平洋地域におけるソフトウェア産業、技術の共通性と特殊性を理解できよう。この中で、「我が国の情報処理産業の課題」は、日本の情報処理産業とその技術を、米国などとの対比に基づき、世界的な視点から分析し、問題点を示す。我が国のソフトウェア技術者、研究者への警鐘と言えよう。

最後に、共同特集の巻頭論文を翻訳して掲載する。IEEE Software の「ソフトウェアの需給と供給のグローバルイゼーション」は、世界におけるソフトウェア開発の現状と将来を豊富な統計データに基づき明らかにする。一方、SEJ の「問題、方法、そして特化」は、JSD 法の提案者である Michael Jackson 氏がソフトウェア方法論のあり方について考察したものである。

本特集は、学会誌編集委員会、各国の執筆者、翻訳者、閲読者、学会の編集関係各位の多大の協力により実現できました。編集者一同深謝いたします。

(平成6年12月2日)

† 富士通(株)ビジネス通信事業本部  
 †† 早稲田大学理工学部  
 ††† 東京工業大学工学部  
 †††† 豊橋技術科学大学知識情報工学系